



関西学院大学災害復興制度研究所ニュースレター

FUKKOU

Vol.24

◀ contents ▶
目次

○巻頭言

大災害時に大学として何ができるか、
何を次に残せるか / 長峯純一…………… 1

○報告

災害ボランティアの連携について考える—NVOAD (全米災害ボランティア機構) 年次大会に参加して / 松田曜子2

地域経営まちづくり塾
—四面会議システムによる「事起こし」
/ 野呂雅之…………… 3

○調査報告

県外避難者に対する避難先の自治体の
支援—岡山市の取組み
/ 田並尚恵…………… 4-5

○2014年度KSNプロジェクト報告

2014年度の県外避難者支援活動につ
いて / 関 嘉寛…………… 6

○観感学楽

生活の漂流—原発災害がもたらしたもの
/ 伊藤千亜

自治体職員にとっての3.11
—支える人々を支える取り組みの必要性
/ 福田 雄…………… 7

○ともに

日本の未来映す人口移動？

夏期開室状況

日本災害復興学会 会員募集中!!… 8

大災害時に大学として何ができるか、 何を次に残せるか

関西学院大学総合政策学部教授

長峯 純一



東日本大震災発生から1週間ほど経った時、仙台にある大学の知人から、阪神・淡路大震災後に関西学院大学がとった対応の記録があれば送って欲しいとの依頼を受けた。早速、いくつかの部署に当時の対応について問い合わせたのであるが、直接そのことを説明できる人はいないとの返答であった。ただ当時のことを記した『阪神・淡路大震災関西学院報告書』（以下、報告書と略。またこの報告書は、後に『激震—そのとき大学人は』というタイトルで日本経済評論社から出版）を見てはどうか、との助言を受けた。

私自身恥ずかしながら、大学としての対応をまとめたこの報告書を読んだことがなかった。早速、図書館から探し出してみると、大学の各部署が当時どのように行動したかが事細かに記されており、この情報は被災地の大学等にとって極めて有益な手引きになると直感した。その記録によれば、関学では震災3日後には、全学生の安否確認を終えていたのである。しかし東北被災地の場合には、震災後1週間どころか1か月後でも、安否確認を終えることができなかったという。

この報告書を被災地の学校関係者に送ろうと、大学や出版社に残部がないかを尋ねたところ、どちらも提供できるものはないとの返事で、コピーをとるしかないかなと半ば覚悟した。そのとき幸運にも、同僚の山田孝子先生が電子データにしてインターネット配信しては、というアドバイスと共に、作業への協力を申し出てくれた。

ただここからがまだ大変であった。報告書を一頁ずつスキャナーで取り込むには、一冊を裁断できれば（つぶせれば）断然作業が容易になるが、その一冊の入手がままならなかったのである。ここでも幸運が起きた。報告書の編集委員会に参加されていた井上琢智先生を電話で捉まえることができ、事情を説明するや協力してもらえることになり、著作権の確認と井上先生ご自身が所有している一冊を後日図書館に提供していただくという約束で、図書館の一冊を廃棄する指示をしてくれたのである。図書館長を経験されるルールをよくご存知であったことから、手続きは上ヶ原図書館から三田分室へとスムーズに伝えられ、翌日一冊を入手するができた。その後は山田先生が徹夜での作業に奮闘してくれたのである。

この間、もう一つの問題は、電子データとなった報告書をどこに掲載するかであった。広報室に相談したところ、大学の情報委員会にかけなければならず、それは新年度まで開催されないということであった。ここでも井上先生が災害復興制度研究所の副所長であったことから、災害復興研のHPに臨時的に掲載する手続きをとってくださる幸運に恵まれた。ここに至ってようやく、HPでの情報発信を関係者にメールで知らせることができた。井上先生はその後学長に就任され、大学HPから災害復興研HPへのリンクを張ってくださったとのことである。

このときの経験から、大きな災害からの記憶や体験を大学組織として伝承することはそう容易ではないということを実感した。阪神・淡路大震災から15年も経てば退職される方もいるし、組織や職場の構成メンバーも大幅に入れ代わっている。大きな災害時には、たいがい想定外の判断と仕事が求められてくるが、われわれ組織人は、普段、どうしても与えられた範囲で、マニュアル的に行動しがちである。先の報告書では、最後に、危機管理には臨機応変な対応が必要であるとの指摘がなされている。

今後いつまたどこで大きな災害が起きるか分からない。被災する側になるのか支援する側になるのかも分からない。しかしいついかなる時も、大学（人）としての役割を発揮できるよう、記憶や経験を大学組織として伝承し、一人ひとりの危機管理能力を高める備えをしておくことを願いたい。